

ISBN 978-4-903875-23-1

Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 20

ユーラシア諸言語の多様性と動態－20号記念号－

ユーラシア言語研究コンソーシアム 2018年3月発行

Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative Volume

The Consortium for the Studies of Eurasian Languages

満洲語の「舟」を表す単語

Manchu Words for “boat”

早田輝洋

HAYATA, Teruhiro

## 満洲語の「舟」を表す単語<sup>(1)</sup>

早田輝洋

【キーワード】語彙の変遷 女真語 ホンタイジの文字改革 乾隆帝の言語改革 黒凶档

### 1 はじめに

何故「舟」か？ 史的に癖のある分布を見せているものの一つであることによる。

「舟」は満洲語で何というか？ 漢満辞典の類、例えば劉厚生(2005)の『漢満詞典』で<船>を引いても<舟>を引いても *cuwan* と *jaXūdai* {*jahūdai*}<sup>(2)</sup> が出てくる。

『満洲実録』を読んだ人は *weixu* {*weihu*} 《獨木船》を思い出すかも知れない。しかし *weixu* は《舟》として典型的とは言えないし、史の変異も *we* の綴りの多様性に過ぎないゆえ今回の対象にしないことにする。

他に、*jaXūdai* {*jaXūdai*} と縁のありそうな無圏点期の *jiqa* {おそらく *jiha*} もヌルハチ時代には盛んに用いられている。

以下、*jiqa*, *jaXūdai*, *cuwan* の3系統の単語の史的分布を追ってみたい。適宜**附表**を見て戴きたい。

### 2 *cuwan*, *jaXūdai*, *jiqa* の3系統の単語の史的分布など

#### 2.1 *cuwan*

漢語<船>の音訳語 *cuwan* は無圏点時代の綴りに *cowan* ~ *cuwan* の揺れがある以上の変異はなく、いつの時代にもよく使われている。ただ『御製増訂清文鑑』とそれを基とした李氏朝鮮司訳院の作成になる『漢清文鑑』とは用いられていない。乾隆帝には避けられていたようである。

#### 2.2 *jaXūdai*

*jaXūdai* は漢満辞書では標準的な単語であるが、『御製増訂清文鑑』と『漢清文鑑』、及び『清文彙書』の補遺『清文補遺』にしか見られないようである。いずれも乾隆期のも

(1) 本稿は 2016 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会(2017 年 3 月 30 日於京都大学文学研究科付属ユーラシア文化研究センター)で発表した内容に補訂を加えたものである。

(2) 満洲文字のローマ字転写によく使われる Möllendorff 式は無圏点満洲文字には、特に無圏点有圏点混交の満洲文字の転写には極度に不適當である故、筆者自身の表記法を用い、Möllendorff 式転写を適宜 { } に囲んで付することにする。

のである。同じく乾隆期の『旧清語』には世祖実禄からの引用に jaXü dai が 2 例は見られるのであるが、現在の筆者には引用元の満文の世祖実禄を見ることができない。乾隆期の実禄改修時に cuwan を jaXü dai に改めたものかと思われるが、現物を見ていない故一抹の不安を拭いえない。(清朝時代の辞書を参考にした後代の辞書は別)

jaXü dai は『御製増訂清文鑑』『漢清文鑑』『清文補遺』にだけ載せられているのであるが、これは cuwan の分布と補い合っている。jaXü dai [jahü dai] は現代の辞書に cuwan と共に広く一般に挙げられているにも拘わらず清朝時代の辞書には珍しい偏りを見せている。『清文補遺』には「船。舟。舊曰 cuwan 今改此」となっている。(現今『清文彙書』と『清文補遺』を一冊に合して彫り直した『清文總彙』なる書もあるが、もとのものと同じでない所もあり注意を要する。上の「舊曰 cuwan 今改此」の一句も『清文總彙』には無い。)

### 2.3 jiqa, jaXa

jiqa 系統の単語は、(古く女真語[Grube1896 のベルリン本<sup>(3)</sup>と Kane1989 の阿波国文庫本<sup>(4)</sup>の<的孩>"G 本 254", <的哈>"阿本" — diXa — を初め)『満文原档』全 10 冊の前半(第 1 ~ 5 冊)即ちヌルハチの時代に盛んに用いられ、『御製清文鑑』『清文彙書』『御製増訂清文鑑』, 李氏朝鮮司訳院の『漢清文鑑』等の辞書には逆行同化した形 jaXa [jaha] として載せられている。有圈点満文の『満文老档』(『満文原档』の内容の一部も書き改められている)でも『満文原档』の jiqa をすべて jaXa [jaha] にしてある。即ち清朝時代の初期には逆行同化していない形 jiqa [jiXa] で現れ、後期には逆行同化した jaXa [jaha] の形で現れている。

jiqa 系統の単語はヌルハチ時代に盛んに用いられていながら、その後、『順治詩経』に 1 例(jiXA), 順治重修の『大清太祖武皇帝実禄』に 1 例(jaXa), その後は康熙 47 年の『御製清文鑑』, 乾隆 36 年の『御製増訂清文鑑』によろやく載せられるのである。

清朝時代の辞書『御製清文鑑』『清文彙書』『御製増訂清文鑑』『漢清文鑑』には jaXa [jaha] (漢語の附してある辞書には<刀船>とされている)が見出し語として載せられている。『御製清文鑑』の jaXa [jaha] の項には用例として『詩経』の jaXa [jaha] が挙げられている。その引用もとの詩経の詩は『順治詩経』(順治 11 年(1654)序)で, we, bira be onco sembi. jiXa Xono baqtaraqü, 後代の『満漢詩経』でも満洲語は読点が違うだけで, we bira be onco sembi. jiXa Xono baqtaraqü, <誰謂河廣。曾不容刀。>となっている。

この jiXa は女真語の diXa と同系に違いないが『順治詩経』の時代に未だに逆行同化(所謂「i の折れ」)を起こさないでいたのであろうか。『順治詩経』の序文の年の翌年の告成という『大清太祖武皇帝実禄』順治重修本に逆行同化形 jaXa が 1 例あるのである。この実禄は、ヌルハチの第 14 子ドルゴンの生母についての記述で種々紛糾があり、何度も改修されているが、問題の紛糾箇所と後から付けられた開国説話以外は殆ど崇徳初纂本あるいは順治初修本のまま、とも言われている(松村 2001:3)。そうなると可成り早い時期から jiXa でなく jaXa になっていたことになる。図 1 に『満文原档』中の jiqa, cowa の冊別の度数を示す。

(3) 以下適宜"G 本"と略記する。

(4) 以下適宜"阿本"と略記する。

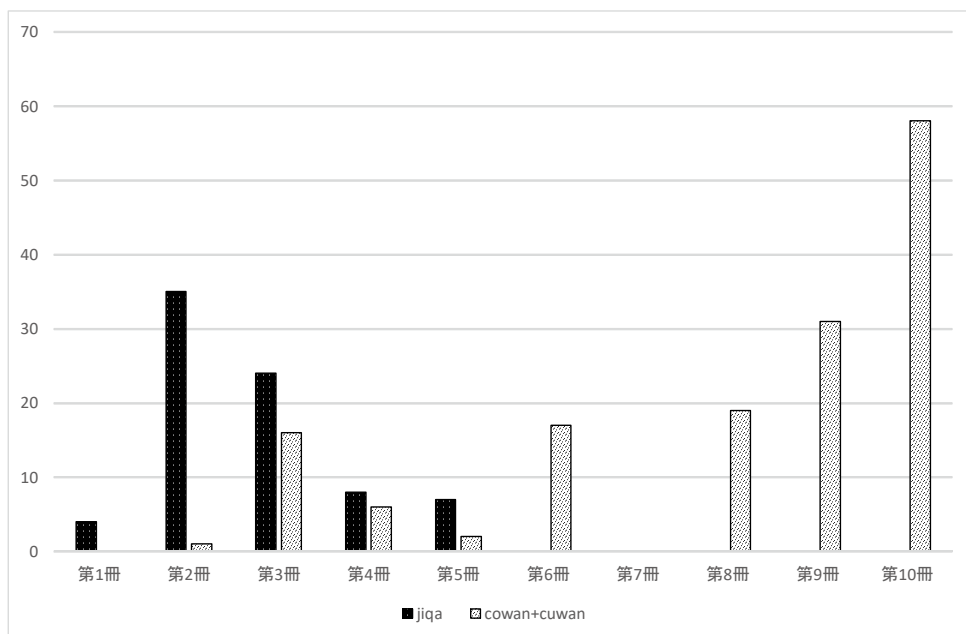


図1 『満文原档』中の jiqa, cowan の冊別の度数

なお『満文原档』の第7冊には《舟》を意味する jiqa, jaXa 系の言葉も cowan, cuwan も無い。既に辞書以外の資料についても『順治詩経』や『大清太祖武皇帝実禄』に触れたが、もっと古い『満文原档』では全10冊中前半の第1冊～第5冊まで（即ち太祖ヌルハチの時代）に jiqa（おそらく [jiXa]）が78例はある。『満文原档』は塗抹されたりして読めない所も多く、また表記は同じでないが同文も多々あり、如何なる意味でも厳密な統計の対象になる代物ではない。『満文大遼国史』（序文に順治3[1646]年4月7日の年時あり）、『満文三国志』（順治7年[1650]序）、『隨軍紀行』（康熙年間三藩の乱の時）、『満文金瓶梅』（康熙47[1708]年）とも皆 jiXa も jaXa も jaXūdai も無い。勿論この四つに cuwan は多数使われている。

**2.4 jaXūdai {jaXūdai}** の（生きた満洲語としての）使用は清朝時代では、筆者のデータベースの範囲では、乾隆期だけのように見える。現代のシベ語の辞書・研究書では、山本謙吾(1969)には載っていないが、李樹蘭・仲謙・王慶豊(1984:282)には zhahūdai / zhahuudai / として載っている。

今西春秋「旧清語訳解」等『東方学紀要3』（1969）の192-193頁に（1）の例がある。

(1) 542. jahūdai i cooha be gaifi, …〔世祖 16: 21a. 順治2年5月己酉〕率舟師…

543. encu teodeme juwere jahūdai arafi, …〔世祖 18: 2a. 順治2年閏6月辛巳朔〕…造剥船…

今西(1969)には、未だ満文の世祖実禄は日本には無く、見られない旨書いてある故、この〔世祖〕は『世祖実禄』の漢文版のことであろう。筆者も満文の世祖実禄は見て確認する機会がないが、康熙初年に世祖実禄が成った時に jaXūdai {jahūdai} が使われていた、とは考えにくい気がする。「乾隆初めの実禄改修時」(今西 1969 : 10) の満文かと想像する。

乾隆 13(1748)年 5 月 15 日の《黒図档》<sup>5)</sup>第 306 冊 第 1 頁に (2) の文が挙げられている(張虹・程大鯤訳編 佟永功審訂「乾隆朝“欽定新清語”(二)」『満語研究』1994 年第 2 期 76 頁)。

- (2) abkai wehiyehe i juwan ilaci aniya ilan biyai juwan de, hesei toktobuha manju gisun  
cuwan be jahūdai seme hūlaha. …

となっているという

既に述べたように、乾隆期の『御製増訂清文鑑』『漢清文鑑』は、康熙期の『御製清文鑑』の語義の説明文中の cuwan に当たる所をすべて jaXūdai {jaXūdai} に改めているが、『満文原档』を乾隆期に当代化したと思われる『満文老档』では、cuwan は jaXūdai {jaXūdai} に改めずそのままである。編輯の時期の故か編輯意図の問題か不明である。

### 3 文字記録から考えられること

今の「舟」の歴史については、我々の普通行っている言語学的手法——例えば、万葉集の万葉仮名資料に反映している語形は、当時の母語話者が使っていた語形として存在し、その脳裏の形を推定して、それが時代の推移と共にどのように変わってきたのか、後代の(信頼出来る)音形と照合する——そういう方法と違い、母語話者が実際に jiXa, jaXa, jaXūdai を使っていたのかどうか、を先ず確定することが必要である。cuwan が乾隆時代の文字資料で、『満文老档』を除いて、急に消滅しているのは、その時代の満洲語話者が急に cuwan を使わなくなった証拠である、とは思えない。

『満文原档』全 10 冊の前半の 5 冊(ヌルハチ時代)では jiqqa {jaXa} が 78 例も使われているのに、「舟」関係の語の無い第 7 冊を除いた後半の 4 冊(ホンタイジの時代)は、皆可成り分厚いものであるが、cuwan ばかりで jiXa, jaXa の系統の語形が現れていないことも注目すべきである。

文字を持つ言語では、擬古的な言語使用があることは当然である。それは一般社会では教養のある証拠と目されるのであるから尚更である。文献資料に現れているものが擬古的なものかどうか、十分に注意する必要がある。実用的な下書き的な档案、日記、小説等に出現しないで、哲学的な文章や辞書にだけ出てくるものには注意が必要である。

『満文原档』の jiXa は、あれだけの文章資料(少なくとも 98 例)からヌルハチ時代には実際に盛んに用いられていたと推定してよからう。それがホンタイジの時代になると瞬時に消えてしまう。これは言語の史的变化として信じられないことである。皇帝の交替、文字・正書法改革と語形 jiXa の消滅とが文字記録では一斉に起こっているのである。政

(5) <黒図>は満洲語 xetu {hetu} 《横》の音訳語である。<引申爲平行, 故黒図档即平行機関之間的来往公文。> (『遼寧省档案馆指南』26 頁)。

治的・民族的・標準方言の認定等等，言語以外の問題が考えられる。

満洲語研究のための言語学以外に，少なくとも「文字資料の探索——文献学」「政治・文化的要因の探索——歴史学？」が必須項目であろう。これを言語学と混同してはならない。

筆者は，順治档案は初めの方だけで，康熙の档案は全くデータベース化していない。今後その方面の研究にも，他の方言にも，シベ語の研究ともども注意を向けたい。

日本祖語の研究には琉球語の研究が非常に重要であることは分かっており，琉球諸語の比較研究は今日ますます盛んになっている。今回たまたま女真語の diXa を持ち出したが，満洲語研究にも女真語の研究は無視できない。女真語と満洲語の対応を見ると，diXa < 的哈 > "阿本" / jaXa 《(刀)船》；tiqo < 替課 > "阿本" / coqo 《鷄》等は逆行同化しているが，jiXa < 只哈 > "阿本"，< 只哈 > "G 本 262,575" / jiXa 《錢》；tiXa < 替哈 > "阿本" / ciXa 《好み，願い》；timaXa < 替麻哈 > "阿本" / cimaXa 《明日》等等逆行同化していない方が多い。女真語の方が満洲語より古い形と思われるものを残している所（女真 di / 満洲 ji 等）が多いようであるが，以下 (3) のような例も有り，あまり単純ではない：

(3)

女真語	満洲語	『漢清文鑑』	現代シベ語	韃靼漂流記
火 < 脱委 > "G 本" t'oh-wei /	towa, tuwa	tu- <u>oa</u>	twa	< トア >
< 他 > "阿本" ta				
見る < 托 > "阿本" to-	towa-, tuwa-	tua-	ta-	記述なし

満洲語では《火》と《見る》は無圈點期でも有圈點期でも towa(-)や tuwa(-)で区別が無いのに，女真語でも，『漢清文鑑』（乾隆 40(1775)年頃）でも（池上二良[1999:14ff.]，和田景子[2013:248ff.]），現代シベ語でも区別がある。しかし女真語における区別と『漢清文鑑』・現代シベ語における区別は平行しているとは言い難いようである。因みに順治最初年の『韃靼漂流記』（池上二良(1999:325)，早田清冷(2016:63)の《火》の記述も挙げた。これには《見る》に当たる語は無い。

逆行同化の音韻条件も詳しく查べるべきであるが，いずれにしても満洲語に於ける逆行同化はモンゴル語より遙かに少ない。日本語は更に少ないようである（逆行同化 kitune-udon > ketune-udon 《狐うどん》，tasukete-kure > tasukete-kere 《助けてくれ》：順行同化 kaki-hen > kaki-hin 《書かない》，ebisu-sama > ebes(u) sama 《恵比寿様》等）。

無圈點満洲語（それも軟口蓋子音の[± high] (k g x と q G X)の区別をしない Möllendorff 式の転写)ばかりを見ていた時には気がつかなかったが，有圈點満洲語では知らなかった語形が無圈點満洲語に出てくるし（例：女真語 neu'u < 禱兀 > "阿本"，nich-hun-wen < 捏渾温 > "G 本 291" 《妹》 / 『満文原档』の満洲語 Na-on, na-on, na-ün, naUn 等），有圈點満洲語 non，現代シベ語 nun。女真語に無縁とは言えないものが多々有る。無圈點満洲語，女真語の研究にもっと力を注がなければならない。

諸資料に於ける jaXü dai, cuwan の使用状況から，以下のような分類ができると思う。

---

康熙 47(1708)年	『御製清文鑑』以前	
乾隆 13(1748)年		『黒図档』欽定 cuwan を jaXūdai に改む
乾隆 15(1750)年	『清文彙書』	
乾隆 36(1771)年		『御製増訂清文鑑』,
乾隆 40(1775)年頃	『満文老档』有圈點重鈔	『漢清文鑑』(李氏朝鮮司訳院)
嘉慶 7(1802)年		『清文補遺』

即ち、乾隆 13 年の jaXūdai の欽定以後も、『清文彙書』と有圈点重鈔文『満文老档』は、その年代にも拘わらず、乾隆的ではない。『清文彙書』は乾隆期の刊行といっても『康熙御製清文鑑』の漢訳が本来の姿のように思われる。『満文老档』の重鈔も乾隆 40 年頃というのはむしろ完成期で、もっと以前から作業が行われていたか、とも考えられる。しかし、このあたりは歴史家の教えを俟ちたい。資料の年代を単純に考え過ぎている等の誤りを犯している恐れもある。

cuwan は、ほぼ乾隆期以前に使用され、jaXūdai {jahūdai} は乾隆期にだけ使われる。cuwan と jaXūdai は同時期には使われない。この両方が《舟》を表す標準的な満洲語というのは適当ではない。

### 参照文献

- 今西春秋 (1969) 「旧清語訳解」等『東方学紀要 3』192-193.
- Grube, Wilhelm (1896) *Die Sprache und Schrift der Jučen*. Leipzig, Kommissions-Verlag von O. Harrassowitz.
- Kane, Daniel (1989) *The Sino-Jurchen Vocabulary of the Bureau of Interpreters*. Indiana Univ. Research Institute for Inner Asian Studies.
- 李樹蘭・仲謙・王慶豊 (1984) 『錫伯語口語研究』民族出版社.
- 早田清冷 (2016) 「言語資料としての「韃靼漂流記」——近世初期日本語・満洲語の鼻音を中心に——」『満族史研究』15 : 55-71.
- 池上二良 (1999[初出 1950, 1951]) 「満洲語の諺文文献について」『満洲語研究』3-42.
- 池上二良 (1999[初出 1993]) 「満洲語方言研究における穆曄駿氏採集資料について」『満洲語研究』321-343.
- 遼寧省档案館編 (1994) 『遼寧省档案館指南』中国档案館指南叢書 中国档案出版社.
- 劉厚生 (2005) 『漢滿詞典』民族出版社.
- 松村順 (2001) 『清太祖実録の研究』東北アジア文献研究叢刊 2 東北アジア文献研究会.
- 和田景子 (2013) 『『漢清文鑑』における満洲語のハングル表記』『大東文化大学日本語学科/20 周年記念論文集』大東文化大学日本語学科 244-255.
- 山本謙吾 (1969) 『満洲語口語基礎語彙集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 張虹・程大鯤訳編 佟永功審訂 (1994) 「乾隆期” 欽定新清語”(二)」『満語研究』1994 年第 2 期 (總第 19 期) 68-77.50.

## 【附表】

	(diXa, jiqā, jaXa)	jaXūdai	cuwan
16世紀?	女真語 (阿波國文庫 女直館譯語)	船舶的哈	
1599 萬曆 27年	太祖 (スルハチ)	滿洲文字 (無圈点字) 創製	
1607 萬曆 35年	太祖	『滿文原檔』最初の記事	多
1616 天命元年	太宗 (ホントイジ)	文字改革	多
1632 天聰 6年	世祖 (フリン)	『太祖実録』告成-原档第 10冊。『滿文原檔』最終の記事	多
1636 崇徳元年		入関・明滅亡	多
1644 順治元年		『滿文大遼国志』	多
1646 順治 3年		『滿文三国志』	多
1650 順治 7年		『順治詩経』	多
1654 順治 11年		『大清太祖武皇帝実録』順治重修本告成	多
1655 順治 12年			多
1662 康熙元年	聖祖 (玄燁)		多
1673-1681 康熙 12-20年		三藩の乱の時『随軍紀行』	多
1683 康熙 22年		『大清全書』	○
1690 康熙 29年		『滿漢同文全書』	○
1708 康熙 47年		『滿文金瓶梅』	○
		『御製清文鑑』	○
1723 雍正元年	世宗 (胤禛)	『清文啓蒙』	○
1750 乾隆 13年	高宗 (弘曆)	『黑凶档』欽定清語 cuwan を jaXūdai に改たむ	○
1750 乾隆 13年		『清文彙書』	○
1771 乾隆 36年		『御製增訂清文鑑』(康熙清文鑑中の cuwan を jaXūdai にする)	○
1775 乾隆 40年		この頃『漢清文鑑』【朝鮮司訳院による『御製増訂清文鑑』の朝鮮語版】	○
		この頃『滿文老档』加圈点重鈔 もとの jiqā は jaXa に改む。cuwan はそのまま	多
1802 嘉慶 7年序	(1786 乾隆 51年跋)	『清文補遺』*【『清文彙書』(1750)の補遺のつもり】	多
		*jaXūdai の項に「舊日 cuwan 今改」の一句あり	○

\*jaXūdai の項に「舊日 cuwan 今改」の一句あり



## Manchu Words for “boat”

Teruhiro HAYATA

Many present-day Manchu dictionaries give the Sino-Manchu word *cuwan* [ʃʷan] and a seemingly native word *jaXü dai* [dʒaxudai] as common Manchu words for “boat.” However, this is a misunderstanding. The purpose of this study is to justify that the historical distribution of Manchu words for “boat,” reflected in dictionaries, novels, and archives, is peculiar.

1) One of the most frequently used words for “boat” is the Sino-Manchu word *cuwan*, which had been used throughout the Manchu speaking period and at least up until the beginning of the Qianlong period. In 1750, the Qianlong Emperor issued a decree replacing *cuwan* with *jaXü dai*. Nevertheless, in the *Manwen Laodang*, the new version of the *Old Manchu Archives* (updated politically and rewritten into the new Manchu script during the Qianlong period), the word *jaXü dai* is not found, whereas many occurrences of *cuwan* are observed.

2) The form *jiXa* [dʒiχa] for “boat” dates back to the Jurchen form *diXa*. [diχa]. At least 79 occurrences of *jiqa* [dʒiχa] are found in the *Original Manchu Archives* of the Nurhaci period and are written in the old Manchu script. The later form is *jiXa* in the new Manchu script. Both *jiXa* and its regressively assimilated form *jaXa* [dʒaxa] occurred once in the Shunzhi period. Neither *jiXa* nor *jaXa* occurred in *Romance of the Three Kingdoms* translated in the Shunzhi period, *The Diary of a Manchu Soldier* written in the Kangxi period, or *Golden Lotus* translated in the Kangxi period. Since the inception of the Manchu dictionary written by the Kangxi Emperor (1708), many occurrences of *jaXa* have been found. In the famous Manchu dictionary written by the Qianlong Emperor (1771), all the occurrences of *cuwan* in the Kangxi version were replaced with *jaXü dai*.

3) The word *jaXü dai* was used mostly in the Qianlong Emperor’s dictionary (1771). This dictionary had a great influence on the compilation of Manchu dictionary entries both at home and abroad. Its Korean version, *Hancheong Mungam*, compiled in the Joseon dynasty (1779?), and the current Manchu-Japanese dictionaries, are more or less founded on the Qianlong Emperor’s dictionary.

The above-mentioned two words, *cuwan* and *jaXü dai*, were not attested in the same period. The former was attested until the Qianlong period and the latter during the Qianlong period. The two words should not be understood as common Manchu words conventionally.